

中学生が考える「学校」と「不登校に対するイメージ」について

櫻井 裕子

1 はじめに

今まで、不登校生徒を対象とした研究は数多く行われてきているが、登校生徒を対象とした不登校についての研究は多くはなされてはいない。しかし筆者は、不登校の周辺要因である周りの子どもたちの、学校や不登校に対する意識を知ることが、不登校支援の一端となるのではないだろうかと考える。なぜなら不登校の多くの子どもたちは、自らが周りの子どもたちからどのように見られているか、ということをととても気にしているからである。平成21年の文部科学省による児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果によると、不登校のきっかけとなった状況において、「その他本人の問題」について「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が約2割を占め、他とくらべて決して少なくはない割合となっていることが見てとれる¹⁾。このことから、不登校の子どもたちが、どれほど学校の中で人間関係が重要視し、強く意識しているか、ということが分かるのではないだろうか。彼らのなかには、学校は友人との付き合い方を学ぶ場所なのだ、と考える者も少なくない。今後、不登校生徒へのサポートを考えていく上で、彼らが復帰する学校とは中学生にとってどのような場所として捉えられているのかということ、不登校の子どもたちが強く意識している他生徒からの評価とはどのようなものなのかを知ることが、必要なことなのではないだろうかと考える。

そこで筆者は、学校へ登校している中学生が、不登校中の生徒に対してどのような評価をしているのか、そして彼らからは学校社会がどのように見えており、どのように意味づけられているのか、さらにそれらの意味づけはどのような要因によってもたらされているのかを探る一連の調査をおこなった。さらに、子どもたちの学校観や登校理由が、不登校に対する考え方にどのような影響を与えているのかも探る。

この一連の調査では、調査目的は大きく分けて2つあげられる。まず、第一の目的は1) 学校へ登校している中学生が「学校」にどのような意味付けをし、そしてどのような理由で登校するのか、という学校観を探ること、2) 中学生のもつ学校観にかかれらを取りまく人間関係はどのように影響しているのかを探ること、3) 不登校中の生徒に対してどのような評価をしているのかを探ることである。さらに第二の目的は、登校中学生の不登校生に対する評価を不登校サポートに生かすための検討をすることである。

本稿では、これらの研究目的のうち、第一の目的である、中学生の学校観と登校理由、不登校評価の関係に焦点をあてて論じていくこととする。学校へ登校している子どもたち

が持っている「学校の意義」「学校とはどんなところか」「なぜ学校へ登校するのか」という学校観を知ることは重要であると考え。なぜなら、不登校に対する感じ方や評価は、裏を返せば彼ら自身の登校に対する考え方が反映されていると考えるからである。学校とは、私たちが教育を受けて成長していく過程で当たり前の存在として受け止められているが、ある意味とても特異な特質をもっている。本稿ではこの「学校」の特異性をふまえて、現代の中学生の学校観と不登校生に対する評価、それらに影響を与える要因について検討する。

2 現代における「学校」と登校行動

まず、現代の子どもたちが多くの時間を過ごす「学校」という場合は当たり前の存在として受け止められているが、とても特異な特質をもっている。たとえば、家庭とはちがいの学校では子どもの学業成績や道徳的なふるまい、公の場であるがための理性的な振る舞いが要求される。現代の学校はさまざまな社会変化のなかにありながら、昔ながらの学級があり、授業が行われ、学校行事、部活動、進路指導といった学校の制度活動が子どもたちを相手に行われている。子どもたちにとって学校生活に多少の不適応はあっても、家庭や地域社会に居場所があれば、子どもの成長や心理的安定は確保される。しかし、都市化に伴い地域社会とのつながりは希薄になり、子どもたちは地域社会の中に居場所を見いだせなくなってしまった。さらに、以前よりも親の子どもへの期待は高まり、学業成績に一喜一憂するようになり、子どもたちにとっても家庭も居場所として見れない場合もある。子どもを取り巻く社会の変化とともに、学校の機能や子どもと学校との関係も変容している。（武内、2010）

さらに現代社会のあり方は、少なからず学校社会と子どもとの関係のあり方に影響を与え、それを規定すると森田（1991）は指摘する。彼は、そのキーワードとして「私事化」をあげている。森田によると、社会の私事化により、登校することはもはや無条件に服従しなければならない義務的で規範的なものではなく、より選択的な行為であるという認識が現れつつあるという。つまり、短期的な個人レベルでの欲求充足が優先され、子どもたちはより私的なレベルで、「いま」の学校生活の中で自分にとって意味あるものを探ろうとする傾向が強くなっているのだ。不登校現象は、学校生活の中に意味を見出そうとする子どもたちと学校の現実との間で発生していると考えることができる。だからこそ、不登校の子どもたちは、上手いかなくなった人間関係を維持することに意味を見出さない。なぜなら、以前とはちがい、現代の子どもたちは学校以外の社会、（例えばインターネットのコミュニティであったり、携帯電話を通じた友人関係であったり、塾であったり）に触れる機会が多くなってきているからである。したがって、不登校現象を理解する為には、子どもたちの視点に立ち、彼らにとって学校がどのように見えており、どのように意味づ

けられているのか、彼らが学校へ登校する理由は何かを知ることから始めなければならないのではないだろうか。

さて、では子どもたちはどうして学校へ登校するのだろうか。子どものたちの登校理由に関する研究は、これまでにいくつかなされている。まず、本間（2000）は、中学校への登校理由に関するアンケートを行い、勉強や将来の為や規範意識などからなる「自己基準」因子、「親圧力」因子、「習慣」因子、そして友達や楽しいからといった「学校魅力」因子の4因子を抽出している。他にも、（小出・高橋・鶴飼 2009, 2008）は本間の作成したアンケートをもとに登校必要や、登校習慣、親圧力といった因子を見出した。しかし、彼らの研究では、子どもたちが不登校に陥る要因として最も多くあげられている、友人関係については詳しく考察されていない。

また、不登校に対する登校生徒の意識・感心に関しては、本間（2000）によって、「中学生をめぐる意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析」のなかで触れられている。彼は、中学生にアンケートを行い、因子分析をした結果、登校生徒から不登校生徒に対する評価として、配慮・共感、批判、無関心、羨望の4因子を抽出している。彼の研究によると、1992年に比べて1998年の調査では、不登校に対して登校生徒は「批判」感情が低くなり「無関心」が高まっているという結果が得られた。そしてその結果は、不登校生徒の増加によって不登校が日常化し、関心の低下を招いているのかもしれないと考察されているのみで、それ以上の事は検討されていない。さらに彼はこの論文のなかで、不登校生徒の再登校を促すためには、在籍校の生徒たちの不登校生に対する「配慮・共感」の因子が高くなる必要があるのではないかと考察している。

しかし、本間（2000）をはじめとするこれらの先行研究は、登校生徒从不登校生徒に対する評価や気持ちのある一面のみを見ているだけのように思われる。なぜなら、中学生にとって「学校」とはそれ自体が彼らにとっての「社会」なのである。そこには、友人、先生、家族といった人間関係はもちろんの事、「学校」は将来社会へでるまでの学習の場である為、子ども達自身の人生設計に対する思惑など、様々な要因が絡み合っている場である。本間（2000）が言うように、再登校に「配慮・共感」が必要であるのなら、どの様にそれを高めればよいのか、また不登校に対する批判や羨望といった評価、感情はどこからどの様にして沸き起こってくるのかということが考察されていない。しかしながら、これらを知ることが、今後の不登校の子ども達へのサポートを考えていく上で必要となるであろうと考える。

今回の筆者の調査は、登校中学生の友人や先生、家族といった他者との人間関係に主として焦点をあて、中学生がどのように「学校」というものを捉えているのか、どのような理由で学校へ登校し、その登校理由は不登校生にたいする評価にどのように影響を与えているのかということを解き明かすこと、さらに本間（2000）が再登校に必要な要素であるとした、「配慮・共感」の因子が、子どもたちの内面からどのように沸き起こってくるのかを検討することを目的とする研究であった。前述したように、本稿ではこれら一連の研究

目的のうちの一つである、中学生の学校観と登校理由、不登校評価の關係に焦点をあて、論じていく。本稿の仮説として、登校理由は不登校に対する評価を左右する要因となっていると考える。例えば、親圧力や登校への義務感がたかい生徒は、不登校を批判、自己基準の高い生徒は批判したり、無関心であったりするだろう。また、部活動や友人関係といった学校魅力の高さは、不登校に対する配慮や共感の気持ちを高める要因となっているであろうと考える。

3 研究方法

3.1 調査対象

採用された調査対象は、奈良県A市の3つの公立中学校の1年生と2年生 704 名（女子 336 名、男子 314 名 不明 54 名）であった。奈良県A市は、県内でも中規模の市で市内には3つの中学校を抱えている。今回の調査では市内のすべての中学校に協力を依頼し承認された。被験者のうち、中学1年生は 475 人、中学2年生 229 人であった。被験者は協力依頼校の中でも調査に協力することを了承した教師の学級にて、集合調査の形で行われた。しかし中学3年生は受験勉強で忙しかったため、調査を行うことはできなかった。さらに、各中学校にはそれぞれ不登校生徒が数名在籍している。

3.2 調査材料と内容

本調査は、質問紙調査形式で行われた。質問紙内容は、学校の意味を問うもの 14 項目、登校理由を問うもの 15 項目、不登校に対する評価を問うもの 13 項目、人間関係等を問うもの 11 項目の、計 54 項目から構成したものであった。各項目のうち、学校の意味を問うもの、登校理由を問うもの、不登校に対する評価を問うものについては、本間（2000）によって行われた質問紙調査を参考とした。さらに、不登校に対する評価については、アンケート項目のほかに、自由記述の欄も設けていた。

3.3 分析の流れ

本稿は、学校へ登校している子どもたちが持っている「学校の意義」「学校とはどんなところか」という学校観を探ること、子ども達の学校観や登校理由が不登校に対する考え方にどのような影響を与えているのかを探ること、を目的としていた。そこでこれらの問いに答えるために調査結果を2つの段階に分けて分析を行うこととした。まず第一の段階は因子分析である。そこで人間関係項目、不登校評価項目、登校理由項目、に因子分析を行い、それぞれの項目がどのような因子で構成されているのかを検討した。その後、第二段階では因子分析で抽出された因子と、学校の意義、学校の印象を問う項目を用いて3つの重回帰分析をおこなった。それは、学校印象を独立変数人間関係因子を独立変数とし登

校理由因子を従属変数とした分析，人間関係因子と登校理由因子を独立変数として不登校生徒に対する評価因子を従属変数とした分析であった．これら2つの重回帰分析は，中学生を取り巻く人間関係や学校への登校理由，不登校生徒に対する評価の関係を明らかにするためのものであった．

4 分析結果

4.1 人間関係項目の因子分析

表1は，人間関係を問う項目，11項目に対して主因子法による因子分析を行い，さらにバリマックス回転を施した結果である．その結果，3つの因子が抽出された．第1因子は先生との関係を測る項目で構成されているため，「先生との関係」と命名された．第2因子，第3因子はそれぞれ，友達との関係や，クラス内での居心地の良さ，家の人との関係を示す項目から構成されているため，「友人関係」「家の人との関係」因子と名づけられた．それぞれの因子負荷量を見ると，「クラスにいとほっとする」「クラスの中で発言できる」項目は，第2因子に振り分けられているものの，第1因子からもある程度負荷があることが分かる．また同様に「先生と気軽に話ができる」の項目もこの2因子から負荷されている．このことから，クラスにおける居心地の良さや，友達関係の良好さには，先生との関係も重要となることがわかる．

表1 人間関係項目の因子分析

	因子		
	1	2	3
先生との関係			
学校で先生に会うのが楽しみ	.743	.111	.102
先生は相談にのってくれる	.676	.128	.182
先生と気軽に話ができる	.555	.411	.035
友人関係			
友達と会うのが楽しみ	.112	.655	.186
友達に相談できる	.190	.561	.186
部活に親しい友達がいる	.058	.504	.138
クラスにいとほっとする	.350	.472	.187
クラスの中で発言できる	.300	.336	.019
家の人との関係			
家の人といると安心する	.151	.166	.850
家にいとほっとする	-.006	.171	.686
家の人に相談できる	.263	.191	.480

4.2 不登校評価項目の因子分析

不登校の生徒をどのように評価しているかを問う11項目について因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った．その結果，固有値1以上の基準で4因子が抽出された．このなかで共通性が極端に低い「自分には関係がない（.055）」の項目を削除して再度因子分析をおこなったところ，4因子が抽出された．第1因子は2項目から構成され，不登校の生徒を心配し，早く学校に来てほしいという配慮をあらわす項目からなるため，「配慮」と名付けられた．第2因子は「うらやましい」「自分もやすみたい」「腹が立つ」の3項目からなり，「批判・羨望」と命名した．第3因子も3項目で構成され，「不思議におもう」「よくない」「理由を知りたい」という疑問や規範を基準とした項目から構成されているため，

「疑問」と名付けた。最後の第4因子は2項目からなり、「無関心」と名付けた。

これら不登校評価についての研究は本間（2000）によって行われていた。彼の研究結果では、「配慮・共感」「批判」

「無関心」「羨望」の4因子が抽出されていた。この結果と本調査とを比較すると、その構成因子違いがあげられる。今回の調査では、「配慮」「批判」「疑問」

「無関心」の4因子が抽出された。「心配」と「無関心」については本間（2000）の結果とほぼ同様の項目で構成されていた。しかし、「批判・羨望」因子については本間（2000）の「批判」と「羨望」

の因子を統合した内容となっており、さらには本間（2000）の研究では抽出されなかった「疑問」の因子が抽出された。これは、多くの子ども達が不登校の子どもと関わる頻度の少なさが反映されているためであろうと思われる。統計的に1クラスに一人は不登校の子がいるといわれているが、クラスの子ども全員が積極的に不登校の子どもと関わるわけではない。その大半は「なぜだろう」「来ていないらしい」と流してしまうことが多い。今回得られた結果は、この現実を反映しているものではないだろうか。

4.3 登校理由の因子分析

表3は、登校理由を問う質問項目15項目についての分析結果である。それぞれの項目の平均値を出した結果、天井効果をしめした「友達にあえるから」の項目をぬき、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果、3因子と4因子間の固有値にある程度の差がみられたので、この項目は3因子構成とした。まず、第1因子は7項目で構成され、自らの内的な動機や基準を理由とした項目が多いことから、「自己基準」と名付けられた。第2因子は4項目からなり、「学校魅力」と

表2 不登校評価項目の因子分析

	因子			
	1	2	3	4
配慮				
早く来てほしい	.819	-.070	.172	-.136
心配	.713	-.138	.226	-.153
批判・羨望				
うらやましい	-.102	.798	-.033	.151
自分も休みたい	-.045	.740	-.080	.148
腹が立つ	-.066	.413	.291	-.053
疑問				
不思議に思う	.134	-.045	.730	.038
よくない	.115	.034	.557	-.196
理由を知りたい	.355	.045	.508	-.028
無関心				
本人の自由	-.062	.104	-.108	.815
本人の好きにさせればいい	-.378	.177	-.042	.578

表3 登校理由の因子分析

	因子		
	1	2	3
自己基準			
将来のため	.710	.147	-.010
高校に行くため	.677	.158	-.022
みんなと差がつく	.657	.003	.165
勉強がおくれる	.626	.110	.045
自分で何事もできる力をつけるため	.624	.151	-.090
勉強がしたい	.484	.258	-.208
あたりまえだから	.479	.182	.198
学校魅力			
学校がたのしい	.182	.630	-.175
部活ができる	.117	.395	-.086
好きな人がいる	.040	.387	-.032
家にいてもつまらない	.092	.380	.182
外的圧力			
親に怒られるから	-.002	-.014	.667
義務教育だから	.301	-.032	.551
なんとなく	-.198	-.129	.280

名付けた。最後の第3因子は「親に怒られるから」「なんとなく」「義務教育だから」と外的な圧力や特にこれといった理由も無く登校しているという理由からなっている。そのため、「外的圧力」と名付けられた。

登校理由についての本間・竹内（1993, 1995）、本間（2000）の研究では、「自己基準」「学校魅力」「親圧力」「習慣」の4因子が抽出され、小出ら（2008）の研究では「登校必要」「登校習慣」「親圧力」の3因子が抽出されていた。これらの先行研究と今回の調査結果を比較してみると、本調査では、登校理由として「自己基準」「学校魅力」「外的圧力」の3因子が抽出された。「自己基準」「学校魅力」は本間・竹内（1993, 1995）、本間（2000）のそれとほぼ内容が一致していた。しかし、「外的圧力」については、彼らの研究の「親圧力」「習慣」を統合した内容となっていた。また今回の分析では「友達と会えるから」は平均得点が極めて高く、天井効果から削除項目とした。しかし、このことは、中学生にとって、学校へ登校する理由として「友達とあえる」ということはとても重要で、当然のことだ、ということを示していると考えられる。

4.4 重回帰分析

4.4.1 学校の意義

表4は、中学生にとって学校はどんなところかという質問項目の平均値である。それぞれの項目の平均値に特に大きな違いはない。さらに、最高得点が4であることから鑑みても得られた平均値は全体的に高く、中学生にとって「学校」というところは全てにおいて重要だ、もしくは学校とはこれらすべてを包括した場であると考えているということがわかる。

表4 学校の意義の平均値

	度数	平均値
勉強するところ	704	3.43
将来のために通うところ	701	3.17
友だちをつくる場所	702	3.38
友だちに会える場所	699	3.31
友だちとの付き合い方を学ぶ	702	3.16
社会のマナーやルールを学ぶ	696	3.34
高校進学のためにかようところ	702	3.26

4.4.2 学校印象

表5は中学生にとって、学校とは気分的にどのようなところか、ということを開いた結果の平均値である。表4と違い、それぞれの項目に平均値のばらつきがあることがよく分かる。特に、多くの学校に通っている中学生にとって、学校とは「行くべきところ」であり、そしてそこは「楽しいところ」であるようである。対して、「気持ち次第で行くところ」という項目が一番平均値が低く、

表5 学校の印象の平均値

	度	平均
楽しいところ	702	3.16
つまらないところ	701	2.20
緊張する場所	700	1.86
辛い場所	700	1.93
ほっとする場所	696	2.17
行くべき場所	696	3.14
気持ち次第で行く場所	701	1.72

4.4.3 学校印象についての重回帰分析

表6は学校の印象項目を独立変数に、登校理由の3つの因子「自己基準」「学校魅力」「外的圧力」それぞれを従属変数に重回帰分析を行った結果である。その結果、学校を「緊張するところ」「ほっとするところ」「行くべきところ」と捉えている子どもたちは、自己基準で学校に登校する傾向にあるということが分かった。さらに、「学校魅力」でもって登校している子どもたちは、学校を「楽しいところ」「ほっとするところ」「つらくないところ」と捉えていることが分かる。また、学校を「楽しくないところ」「つまらないところ」「行くべきなところ」と捉えている子どもたちは、「外的圧力」によって登校を促されている傾向にあるということがわかった。

表6 学校印象因子を独立変数とした重回帰分析

独立変数	従属変数		
	自己基準	学校魅力	外的圧力
楽しいところ	.077	.465**	-.151*
つまらないところ	-.058	-.030	.222**
緊張するところ	.157**	.011	.000
辛いところ	-.064	-.085*	.053
ほっとするところ	.079*	.242**	.045
行くべきところ	.344**	.043	.173**
重相関係数	.438**	.654**	.380**
決定係数	.192**	.428**	.144**

**: $p<.01$, *: $p<.05$

4.4.4 登校理由についての重回帰分析

表7は人間関係に関する因子得点を独立変数、登校理由に関する因子得点をそれぞれ従属変数として重回帰分析を行った結果である。

表7 人間関係因子を独立変数とした重回帰分析

独立変数	従属変数		
	自己基準	学校魅力	外的圧力
先生との関係	.191**	.242**	-.157**
友達との関係	.038	.457**	-.102*
家の人との関係	.304**	-.703	-.158**
性別	-.084*	.746	.078
重相関係数	.369**	.553**	.261**
決定係数	.136**	.305**	.068**

**: $p<.01$, *: $p<.05$

まず、自己基準因子についてみると、表7の重回帰分析の結果より、登校理由の自己基準に影響を与えるのは、先生との関係と家の人との関係であることが分かった。つま

り、両者と子どもとの関係が良好であるならば、子どもは自己基準での登校がより促されるということである。自己基準に含まれる項目は、前述したように自らの内的な動機や基準を理由とした項目から構成されている。言い換えれば、登校や勉強、他者との関係を形成する動機を高めたり、基準を形作る要因として、先生や家の人との関係が重要となっているといえるだろう。さらに、学校魅力因子については、学校が楽しいから、という学校魅力が登校理由となるには、な友達関係と先生との関係が大きく作用することが分かった。標準化係数をみると、とりわけ友達関係が重要であることがわかる。最後に人間関係についての因子を独立変数とし、外的圧力因子を従属変数とした重回帰分析の結果、友達関係、先生との関係、家の人との関係がよくない場合には、自発的なものではなく義務感や外的な（親や先生、規範意識からの）圧力による登校理由が高まるといえることが分かった。自己基準や学校魅力を感じて登校するためには、友達、先生、家の人との関係が良好である必要があることは前述の分析結果から述べる事が出来たが、この分析ではその結果をさらに裏付けるものであった。

4.4.5 不登校評価についての重回帰分析

表 8 不登校評価を従属変数とした重回帰分析

独立変数	従属変数	標準化係数		
	配慮	批判・羨望	疑問	無関心
先生との関係	.151*	.023	.020	-.106*
友達との関係	.055	-.122*	.168*	.062
家の人との関係	.057	.120*	.143*	.035
性別	.197**	-.084*	-.040	.077
自己基準	.164**	-.201**	.135*	-.207**
学校魅力	.011	-.131*	.153	.067
外的圧力	-.029	.304**	.069	.073
重相関係数	.353**	.433**	.368**	.277**
決定係数	.124**	.188**	.135**	.077**

**: $p<.01$, *: $p<.05$

表 8 は、人間関係の因子得点、登校理由の因子得点、性別を独立変数とし、不登校評価の「配慮」「批判・羨望」「疑問」「無関心」の 4 つの因子得点を従属変数として重回帰分析を行った結果である。表 8 より、不登校の生徒に対して心配したり、早く来てほしいと願う配慮の気持ちに影響を与えるのは、「先生との関係」「性別」「自己基準」であることが分かる。先生との良好な関係や高い自己基準による登校理由が不登校の生徒への配慮を高める。また、男子生徒よりも女子の方が、不登校生徒にたいして、心配する気持ちが高い。さらに、不登校生徒への批判や羨望の気持ちを左右するのは、自己基準や学校魅力による登校理由が低いことであることが分かった。また、女子よりも男子のほうが不登校生徒に

批判や羨望の気持ちを持つ傾向にある。さらに、外的圧力によって登校している場合や家の人との関係が良い場合も、批判や羨望の気持ちが高くなることが分かった。また、「疑問」の因子を従属変数とした分析結果から、不登校生徒へどうして来ないのか、不思議だ、理由が知りたいという疑問の気持ちの元となるのは、良好な友達関係や家の人との関係、自己基準や学校魅力により高い登校理由であるということがわかった。さらに、不登校は自分には関係がないという無関心に影響を与えるのは、登校理由が低い自己基準である場合と、外的圧力による登校が高い時であることがいえる。

5 考察

5.1 現代の中学生にとっての「学校」

あなたにとって、「学校」とはどんなところか、何をするとところか、と問われて的確に答えられる人は多くはないのではないだろうか。学校「何をするか」と機能について問われれば、勉強もするし、友達もつくるし、部活動もする、と考える。また、中学生にとっては、中学校は高校へ通うための前段階の学校であるがゆえに、「学校」とは高校に進学するためのものであるというのもまた事実である。それでは勉強だけしていればよいのか、言われればそうではないような気がする。つまり、中学生にとって「学校」というのはある特定の意義や機能を持っているものではなく、それら様々な機能、意義を包括した「社会」と捉えるのが適当なのではないだろうか。「学校」とは学校の機能を問う質問項目において、中学生にとっての「学校」についてそれぞれの項目の平均値はほぼ一定となった。それはつまりところ上記の理由からなのではないだろうか。

しかし、学校の「気分的な」印象における項目間の平均値には差が見られた。そこにこそ、中学生にとっての「学校」社会とはどのようなものかということが表れているのではないだろうかと考える。学校への登校理由の一つの因子である「自己基準」に含まれる項目とは「勉強がおくれるから」「高校にいくため」「勉強がしたいから」等があった。これらを背景として登校する彼らは、学校を緊張する、ほっとする、そして行くべきところと捉えているようである。この結果は一見「緊張するが、ほっとする」という矛盾を含んでいるように思われる。しかし、「ほっとする」という感情にはさまざまな安心の仕方があるのではないだろうかということに気づいた。つまり、安心したり、気分的に楽であることのほかに、他者と同じであるという連帯感や、他者に遅れをとらないという安心感である。これらの安心感は、もし学校に行かなければ、「皆と差がつく」「勉強が遅れる」といった不安感の裏返しである。さらに、「学校魅力」でもって登校している子ども達は、学校を「楽しいところ」「ほっとするところ」「つらくないところ」と捉える傾向にある。ここでも学校を「ほっとするところ」と捉えられているが、上述した「自己基準」によって登校する子ども達のもつ印象とはまた違う種類の安心感であると考えなければならないだろう。さ

らに、学校を「楽しくないところ」「つまらないところ」「行くべきなところ」と捉えている子ども達は、親や先生による「外的圧力」によって登校を促されている傾向にあるということがわかった。これら 3 種の登校理由を決定づける学校の印象は、一見するとばらばらであるように思われる。しかし、これらは全て「他者との関係」の上に成り立つ印象であると考えられる。たとえば、上述した 2 種類の「ほっとするところ」という印象からは、他者と比べた場合の不安感と他者と同じであるという安心感、そして他者と良好な関係をもつ事の楽しさや安心感が垣間見られる。我々は、中学生にとっての「学校」とは勉強や友人、部活、進学といった学校が持つ機能に注目しがちである。しかし、中学生にとっての「学校」とは学校が持つ機能よりもむしろ、そこでどのような人間関係が持たれているか、そしてどんな気持ちでそこに居るかという事のほうが重要なのではないだろうか。なぜなら、その気持ちの持ちよりの違いにこそ、子どもたち自身のリアルな学校観が現れているからである。

5.2 子どもたちを学校へとうながす要因

さらに本調査では、中学生の登校理由項目の因子分析において、「友達と会えるから」という項目は平均得点が極めて高く、天井効果から削除項目とされた。しかし、このことは、中学生にとって、学校へ登校する理由として「友達とあえる」ということ、つまり友人との良好な人間関係は、「学校」について考えるうえでとても重要で当然のことだ、ということを示している、と考えられるのではないだろうか。森田（1991）は『不登校現象の社会学』の中で、社会の私事化により、登校することはもはや無条件に服従しなければならない義務的で規範的なものではなく、より選択的な行為であるという認識が現れつつある、と述べている。つまり、あって当然であるべき“友人との楽しい時間”が得られないとすれば、彼らにとって学校とはなんら意味を成さないものとなりうるのではないだろうか。学校とは「勉強するところ」「魅力的なところ」「義務で行かなければならないところ」という認識さえも、前提となる学校での人間関係、つまり良好な友人関係が確立されていなければ、登校行動を維持していくだけの意思が損なわれてしまう可能性もある。それだけ、子ども達にとっての友人関係とは大きなウェイトを占めるものなのではないだろうか。

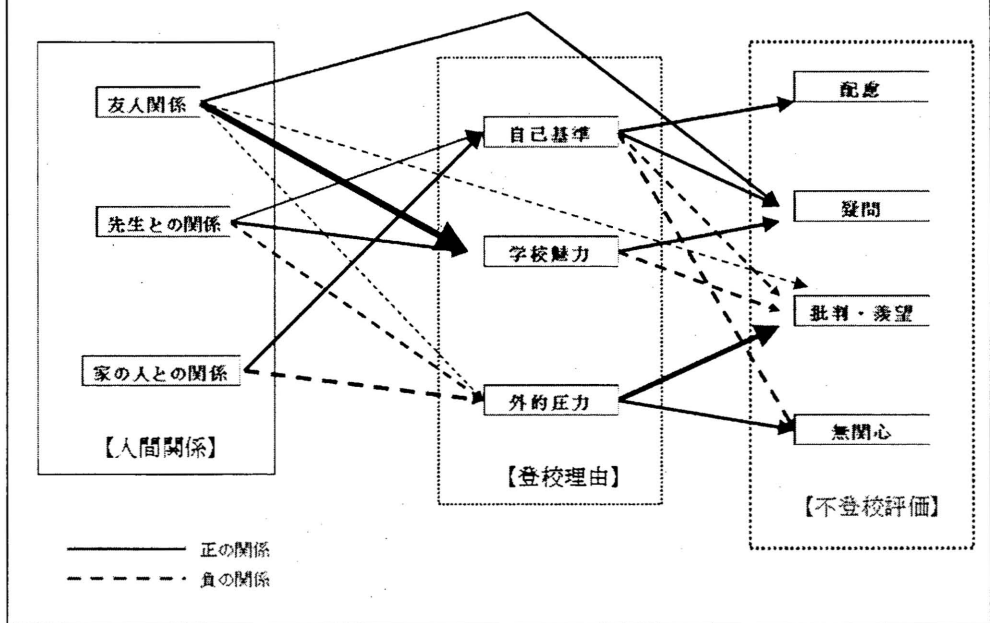
学校への強い求心力は、以前は日本の学校は経済大国への原動力として効果が認められてきたが、バブル経済の崩壊後の就職難が学校経由の就職という機能を弱め、現在では「学歴」というシンボルのみが残っていると武内（2010）は述べる。さらに彼はマス・メディアの発達が子ども、大人に関係なく知識をもたらし、学校だけが独占的に知識を授ける機能を果たすわけではない、と述べている。この武内（2010）の主張に従えば、今回調査した「学校は何の為に通うのか」という「学校の意義」の 7 項目のうち約半数の機能が低下していることになる。今の時代、偏差値の高い学校を卒業しただけでは就職できないほどに就職氷河期であることは確かである。大学を卒業した人も、卒業後に就職にむけて資格の取れる専門学校に入学するケースも増えてきている。つまり、武内（2010）が言うよう

に「高校・大学→就職」というラインが機能しなくなっているということだ。ではなぜ本調査では学校の意義 7 項目において平均値に違いがみられなかったのであろうか。それはつまり、「学校の機能」のイメージとして定着していたり、当然のこととして私たちのなかに内在化しているからに他ならない。学年があがるごとに将来への不安感は強くなる。（指定都市教育研究所編，1985）さらに、子どもたちは現代の先行き不透明な社会不安をマス・メディア等を通して感じている。良い学校へ行けばよい就職が得られるということも、もはや神話に過ぎないことも肌で感じている。実際に卒業後はコンビニでバイトやフリーターになると言う中学生もいる。学校の機能の一部が形骸化しつつある中で、子どもたちは残った機能、つまり学校での友人関係にリアリティを感じているのではないだろうか。だからこそ、学校や家庭のどこかに安定した他者との関係があれば子どもたちは学校へ登校することができる。学校で良好な友人関係を築くことができれば、子どもたちは学校へ問題なく登校する。そうではなくとも先生や家の人との関係が深ければ、自己基準による登校が高まる。つまり先生や家の人との関係が、形骸化しつつある学校の機能への信頼回復の一端となっているのかもしれない。このように友人関係を代表とする人間関係が子どもたちを学校へと引っ張っているのではないだろうか。

5.3 人間関係、登校理由が不登校評価を規定する

本調査結果より、中学生の友人や家族、先生との人間関係のあり方が、彼らの登校理由を決定付け、さらに、彼らがどのような理由で学校に行っているか、ということが不登校に対する評価を決定するという事が分かった。例えば、周りの人との関係が良好と感じられていなければ、自らの自発的動機により学校へ登校するのではなく、外的な圧力つまり、行かなければ先生や親から怒られるから学校へ行く、といったような強迫観念をもって嫌々ながらも登校するという事が分かった。そしてそのような子ども達は、不登校に対して批判的で羨望的な評価を下している。つまり、自分達は嫌々ながらも我慢して登校しているのに、不登校生徒はどうして登校して来ないのか、悪いことだ、いけない事だ、と思ったり、自分も不登校になれば、羨ましいと感じているのだ。ところが、表9をみればわかるように、先生や家の人との深いつながりは、自己基準による登校を刺激し、不登校生への配慮を導く。しかし、友人の良好な関係は学校魅力を介して配慮ではなく、疑問へとつながっている。またわずかではあるが、友人との良好でない関係は、登校理由を介さずに批判・羨望へとつながっている。同じように先生や家の人との希薄な関係は批判・羨望へとつながるが、こちらは学校魅力ではなく外的圧力を經由しているのだ。人間関係のなかでもこのような違いが生じるのはなぜだろうか。それはそれぞれのひとから何を得るのかという違いからくるのではないだろうか。つまり、先生や家の人は子どもたちにとって常に目上であり、監視を行っている人々である。それにたいして、友人は子どもたちにとっては同朋であり、遊びや快樂を与えてくれる人々である。この立場の違いが大きく影響していると考えられる。

表9 不登校評価（配慮）をめぐるモデル図



今回の研究では、本間（2000）の研究では抽出されなかった「疑問」の因子が抽出された。しかし、この結果は考えてみれば当然なのではないだろうか。たいていの子どもの場合、普通に学校に通っていれば、ある子どもがどうして学校に来れないのかという理由はわからない。それは、疑問の感情を起こさせるのが学校に魅力を感じさせるような良好な人間関係であったり、自己基準を高めるような先生や家の人との関係であることからよくわかる。なぜなら、自分たちは楽しく学校で過ごしていたり、将来への展望をもっていたりし、それには学校への登校が必要であると感じているからである。しかし不登校の理由として、例えば「いじめがあった」という具体的なきっかけや理由があれば分かりやすいが、家庭環境が影響している場合等そうでないことも多々ある。さらに学年をまたいでの不登校であったりすると、知らない生徒も少なからず出てくる。自由記述においても、「どうして来れないかわからない」「理由が知りたい」といった意見も多数散見された。今回の調査では、不登校生徒との親密さと「疑問」との間には優位な影響は発見されなかったが、多少なりとも不登校の生徒と関わることによってその疑問は少なくなり、彼らが抱えている問題にある程度理解をしめすようになるのではないだろうかと考える。

6 おわりに

現代社会では学校の機能の一部が形骸化しつつあるが、かろうじて先生や家の人との親密な繋がりが、子どもたちの内発的な将来への展望や希望を形作っていると考えられる。しかし、子どもたちは学校の機能の一部の形骸化をぼんやりと感じとっているため、残った機能、つまり学校での友人関係に学校の機能としての現実味を感じとっていると考えられる。どの子にとっても学校観および不登校生徒への評価など、思考の枠組みやイメージを作り上げる過程において先生や家の人、友人をはじめとした他者との関係は重要である。そこでどのような質のやり取りが行われるかということが大切なのだ。

不登校の子どもたちの多くは、常にまわりの視線を気にしている。筆者は現在、適応指導教室で指導員をしているが、そこに通ってきている子どもたちも、朝、近所の人たちの目を気にして制服を着たり、マスクをして家を出たり、登校するのに不思議でない時間に家を出てきたりする。そして、通学途中に他の子どもと顔を合わせないようにわざと遠回りをしたりする。さらに、学校に登校した際には、他の子どもたちと鉢合わせしないように休み時間を避けたりする。この彼等の行動は、ただ単に“気まずい”という言葉だけで言い表すのは早計であろう。不登校である彼ら自身が、「現状のままではいけないこと」「自分が友だちとは違うことをしていること」そして「学校の中での友人関係の希薄さ」を痛いほどよく分かっているのである。そして、誰よりも自分の将来、つまり進路に対する不安を抱えているのだ。だからこそ、他の子ども達から「あの子はあんな事をして…」という目でみられることを恐れているのではないだろうか。本稿では、中学生にとっての「学校観」や「不登校生への評価」は彼らの人間関係にもとづいているということが示唆された。今後の課題としては、本稿で明らかにした登校中学生の不登校生に対する評価を不登校生のサポートに生かすための検討をすることが必要である。

【注】

- 1) 文部科学省が全国の国公立の中小高等学校を対象に行っている調査である。本稿では特に小中学校の不登校についての結果を参照した。

【文献】

河合隼雄, 1992, 『子どもと学校』岩波新書。

小出ひろ未・高橋美枝・鶴飼美昭, 2009, 「小学生と中学生の登校理由と学校教授感情」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』15: 143-155。

小出ひろ未・高橋美枝・鶴飼美昭, 2008, 「登校理由と学校好き感情についての一考察」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』14: 107-116。

指定都市教育研究所連盟編, 1985, 『子どもの学校観「子どもは先生や学校に何を求めているのか」』 東洋館出版社.

武内清, 2010, 『[子ども社会シリーズ 3] 子どもと学校』 学文社.

本間友巳, 2000, 「中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析」『教育心理学研究』 48: 23-41.

本間友巳・竹内伸宣, 1995, 「中学生の登校を規定する要因と不登校者への評価意識」『神戸海星女子学院大学短期大学研究紀要』 33: 261-277.

本間友巳・竹内伸宣, 1993, 「中学生の登校を巡る諸問題」『日本教育心理学会総会発表論文集』 35: 468.

森田洋司, 1991, 『「不登校」現象の社会学』 学文社.

文部科学省, 2010, 「平成 21 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/08/1296216.htm, 2010. 12. 20)

(さくらい ゆうこ 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

About Images for School Refusal of Junior High Students

SAKURAI Yuko

Abstract

In recent years, the number of school refusers increases, and it become one of the big problems in the educational front. There are lots of studies for the school refusers, but there are not so much which studies about the school refusal for the school attendance student. However, we think that it is important to study how junior high school students who attend their school, think about school refusers. Because of sometimes they would be one of the causes for school refusals. And also school refusers mention that how oneself is seen from other junior high school students who attend their school. In this article, we focused on how junior high school students who attend their school think about the school refusals and School views, from the viewpoint of relationships with their friends or others.

So we used questionnaire that have 54 questions about School views, school refusals, and relationships with others. The results of this study clearly indicated that relationship with others affect to the Schoolviews, the reason of going to school, and the evaluations to school refusals. Recently in Japan, some of the functions of the school become getting weaker. The relations with another person reinforce these functions and children were feeling importance of these relationships with their friends instead of the weaker functions of the school. Therefore we concluded that the relationships with others are important for children whose thought is on the way to construct.

(Keywords; school refuser, evaluation for school refusal, relationships, School views)